



思わわしい事件が起きた。炉心シユラウドもジェットポンプも取り換えの実績があり、また補強だけで運転が認められた歴史もある。データを改ざんしてまで損傷を隠す必要は伺もないのだ。それが延べ二十九件、うち十一件は隠蔽したまま運転を続けていたという。原子力に対する信用、ここに極まった感がある。

発表直後、マスコミからの質問は一つ。運転継続による安全性と、情報提供後二年も経った事の是非だ。前者は圧力容器の内部に置かれた構造物のひび割れだ。仮に進展しても炉心冷却に大きな影響を与えない。安全問題とはならないものだ。後者は、今後の論点だろう。

推測で語るのには憤むべきだが、今は非常時だ。お許しを願おう。ヒントは改ざんが八〇年代後半から九〇年代に行われている点だ。一度ベルリンの壁が崩壊し、米ソの冷戦構造が終焉した時に当たる。軍事機密、商業機密の制約が失効し、情報公開が一気に進み出した時期だ。この世界の動きに対し日本の反応はきわめて鈍かった。集団帰属意識の高い日本社会では、古くからの秘密隠蔽体質を素早く

## 東電・原発損傷隠蔽事件



石川 迪夫

いしかわ・みちお  
一原子力発電技術機  
構技術顧問。56年東  
大機械工学を卒業  
し、日本原子力研究  
所東海研究所副所長  
などを終り91年、北  
大工学部教授。原子  
力発電と安全工学が  
専門。兵庫県出身、  
68歳。

一掃できないのだ。こんな時期にシユラウドのひび割れが見付かった。大きな割れを持つものは公表し修理したが、小さな傷のものを後回しにしたのではないか。シユラウドなど、数の上だけの改修には高度の技術と多くさんだ。何の目的なのか。だがこの目的の背後にあるものをいなら発表も後回し、こんな判断が隠蔽に繋がったのではなからうか。

日本ハムに及んだ。事は安全問題を越える規制慣行を改め、リスクに基づく規制に切り替えた。これは、原子力安全の本質に関する事項だけNRCが関与するという、大胆な改革だ。これが電力事業者の意欲を高め、米国の原子力発電は安全面でも営業面でも、著しい好成績を挙げている。米国社会は原子力四十年の実績を冷静に分析し、変化・向上を容認しているのだ。

それが東電一社だけの問題かというところし障りないことを規制当局も世間も認められる。折しも食肉偽装事件が雪印から起っている。この合理的な社会意識が情報公開を支えている。さ

例えば、昭和の初期から続く一年一回の定検慣行、今日の原子力技術になじまぬ旧弊だ。ドレン弁の傷一つを大きな安全問題として騒ぎ立てるマスコミ、世界広らに、米国原子力規制委員会(NRC)は、従来の細部に至るまで、営営を阻んでいる。「弁明になるが、傷一つ許さぬ基準」。南社長の辞任の弁が耳に痛い。安全第一の原子力現場を圧迫する不合理や非常識の存在を許していたのだ。これを改め排除するのが、我々安全関係者の責務だ。今、反省している。

この不合理、非常識は改めねばならぬが、その前に、まず自らの姿勢を正すことが先だ。屈して伸びよ。今は過去を清算して反省する時だ。